

山東崗山の觀經刻石

八 木 宣 諦

この刻石は、山東省鄒県にある四山刻經とよばれるものの一つで、金石家が崗山摩崖仏經として著録するもの。觀無量壽經（觀經と略稱）の序分一八五字を刻したものである。

觀經の成立には原本が存在しないことによって、インド成立に對して否定的見解が提示され、中央アジア撰述說、中国撰述說などがあつて未だ決定をみないのである。觀經は文献上からは、『梁高僧傳』や『出三藏記集』に記述され、南北朝時代後半には流布し講說されていたことが窺えるが、崗山のものは年代、造主名を有する史実証資料として重要なものである。最近、藤田宏達博士は觀無量壽經の諸本を整理され、石刻のものに唐上无のもの^①と房山の刻をあげているが、崗山のものは集録されていない。

刻經研究については、現在のところ仏教の刻經を集大成した資料がないから、資料としては、金石書を用いることが妥当と思われる。石刻資料中より觀經の刻石されたものを拾い上げると、五点ある。

名 称	年	出 典
① 觀無量壽經	大象二（五八〇）崗山	山左金石、十
② 觀無量壽經	上元元（六七四） 紀王慎造	八瓊室三八 金石補正
③ 觀無量壽經	無年月 房山	
④ 無量壽觀經	垂拱三（六八七）中山法果寺	語石、四
⑤ 觀無量壽經	建中三（七八二）	宝刻叢編、八

唐上元の紀王慎造の觀無量壽經刻石については既に竹内義雄氏の研究があり^②、拓本によれば碑は高さ七尺三寸、巾四尺で四面に經文を刻し、正面四一行行七四字、側面十行行七四字で最後面の拓を欠いているという。經文については、諸本と校合し、今本は比較的にこの刻石に近いといわれる。

崗山の觀經刻石は現在のところ最も古い刻だが、『金石萃編』には集録なく、『八瓊室金石補正』では惠暉題名として取上げてある。阮元の『山左金石志』は、經典名を挙げてな

いが文字を克明に記録した資料である。

日本では昭和十六年、道端良秀氏の探訪があり、後に『中国の石仏石経』に纏め報告されたが、観経刻石についての拓本や写真がなく明了を欠いている。書道方面では、筑波大の今井凌雪教授が訪中の折、自ら拓本冊を撮影して整本された『岡山題名と摩崖仏経』がある。これによって、崗山の観経刻石と楞伽経刻石の全文が見られるようになった。更に最近、清原実門氏が現地を訪れ、岡山観経刻石の全面拓を載せた報告記事を書いており、その全貌が解明されるに至った。

茲で上記諸資料を基に、崗山の観経刻石が、北斉・北周代の刻経としてどういう特徴、意義をもつものなのかを考察して行きたい。北斉刻経の成立背景については、既に発表した。

北斉の国都鄴（臨漳）に近い泰安から、鄒県に至る南北百回の山岳、即ち泰山から徂徠山、水牛山を経て鄒県の四山に至る街道沿いには古く山岳信仰があったとされ、良質の石に恵まれ多くの経典が刻された。摩崖刻経とよばれる自然巖に経文を大書したものである。刻石された経典名をみると。

石刻名称	地名	山左金	八瓊室金	刻	経
1 徂徠山大般若経	泰安	十	廿二	大般若経	
2 水牛山仏経碑	寧陽	十	廿二	文殊般若経	

山東崗山の観経刻石（八木）

3 泰山石経略金剛経	泰安	十	金剛般若経
4 尖山摩崖十種	鄒	十	大般若経、文殊般若経
5 小鉄山摩崖残字八種	鄒	十	廿二
6 崗山摩崖仏経四種	鄒	十	廿三
7 葛山摩崖二種	鄒	十	楞伽経、観無量寿経
8 南響堂山刻経	磁		大般若経
9 北響堂山刻経	武安		華嚴経、文殊般若経等 維摩経、勝鬘経 字経、弥勒成仏経等

阮元の『山左金石志』は、刻石の字句をそのまま集録したのみで経典名を記さない欠点があるが、四山刻経（4-7）の二四種は全て記録した石刻文献で最も詳しい資料である。道端氏の報告を参照して総合すると、表のような経典名が判名する。随って北斉、北周代に刻された経典群を述べると。

一つは、大般若経、文殊般若経、金剛般若経、大集経、楞伽経等の経典類である。

徂徠山の般若経刻石は、先ず仏号（弥勒仏、阿弥陀仏、観世音仏）を刻り、羅什訳大品般若経問乘品の十八空の空名を刻り、造主、年号という構成である。水牛山文殊般若経刻石

は、碑型で上に仏龕を刻り、左右に文殊と般若を題額にして、碑文に経文が十行行三十字で刻してある。

楞伽經刻石崗山にあり、菩提流支訳入楞伽經請仏品の始めの部分で、一つの大石の表裏に一〇八字と他の石にも分刻して一八五字を刻したものである。

これらの一群は、当時教学の中心であった般若学や地論宗の必要に応じた經典刻石と考えられる。

他の一群は、維摩經、勝鬘經、觀經、李経等の経で、在家が主体となつて仏法が説かれる經典が選ばれたとみることが出来る。李経のように、菩薩僧が自ら政務に参劃し治国の任に当るといった内容の特殊な經典も見い出される。

これらの刻経が、北周武帝による廃仏が契機となつて盛んになったことは、造営の施主となつた人達が、唐邕写経碑（五七二）匡詰刻経頌（五七九）に表明しているところである。従つて、廃仏に対して正法護持の目的のために刻経されたと考えるのが通説である。しかし、經典全文を刻したものは極めて少なく、部分刻経のものが殆んどで、経文は序分の部分か、その經典の主意とするところを選んで刻し、一切経としての意図はなかった。また経文を刻す前か後に、仏号を大書して刻している特徴をもっている。

次に、經典刻石の造営に関わつた人名について考える。

徂徠山には、冠軍將軍梁父県令であつた王子椿が造主とな

っている。尖山には、刻経主韋子深の一族並びに唐邕妃趙義の名がある。小鉄山には、経主として寧朔將軍の孫洽、平越將軍の閭長嵩の名があるが伝記は不詳である。また小鉄山西側の摩崖には匡詰刻経頌が刻られていて、貴族がこれら刻経の造主であつたことがわかる。匡詰は前漢元帝の時に丞相となつた匡衡の子孫である。北魏の末期洛陽の貴族によつて、竜門造像が造営されたことと成立事情を同じくしているように思われる。そして、この刻経を指導した教化僧として、尖山や小鉄山に僧安道壹や崗山に比丘惠暉の名があるが、高僧伝には記録がない。

そこで、前記のような北齊・北周の刻経の共通点をみた上で、全面拓本によつて全容のつかめる崗山の観經刻石によつて、形態的面から刻経の意図するところを推察したい。観經刻石は、鶏嘴石とよばれる高さ三・五mの巨岩の東面、南面、北面の三面に刻されたもので、晁良耶舎訳觀無量寿經の序分の一六一字の経文と跋文が刻られている。

（東面）

- 1 如是我聞一時佛在王舎城耆闍崛山
- 2 中興大比丘衆千二百五十人俱菩薩
- 3 三万二千文殊師利法王子而為上首
- 4 余時王舎大城有一太子名阿闍世隨
- 5 順調達惡友之教取執父王頻婆娑羅

6 幽閉置於七重室内制諸羣臣一不得
往國大夫人名韋提希恭敬大王澡浴

7 清淨以蘇蜜和麝用塗其身諸瓔珞中

* 正藏本酥

8 盛蒲桃漿蜜以上王余時大王食麤飲

* 葡萄

9 漿求水漱口漱口畢已合

(南面)

常恭敬向耆闍崛山「山遙礼世尊而作是」言大目犍連是吾

親友願興慈悲」授我八戒」(正藏十二、340 c l 341 a)

(北面)

二郎」比丘惠暉」比丘尼法会」大象二年七月三」日比丘道

成僧岸」唐章」

象主朝思和」韋伝竹妃(この人名のみ仏号の上段に)

釈迦文佛」弥勒尊佛」阿弥陀佛」

とあり、大象二(五八〇)年に廃仏が終つて復仏が詔されて一ヶ月後、廃仏に会わないよう願つて製作された刻経とみられるが、造主や比丘などの人名については他の文献に手懸りは得られない。

仏号を刻したものは、崗山の他、徂徠山や北響堂山等にもあり、この時期に流行した形式とみられ、これらは仏像を造るのと同等の表現と考えられる。

この観経刻石の構成をみると、刻経文、造主、紀年、仏号刻石の順に刻されていて、四山刻経の中では最もはっきりし

山東崗山の観経刻石(八木)

た形で残されている。溯つてこの形式に近いものを探ると、竜門造像記の一部にこういうものがある。

元来仏像を造つてその由来を記し、祈願の文を附したのが造像記の定型とされるが、北海王元詳造像記(四九八)のように、仏像の横に、別に碑型をした造像記のスタイルが表われる。やがて北斉代に、文殊般若經碑にみるような純粹に文字碑化していく造像碑への推移がみられる。

そこで、造像記の構成(殆んどものは紀年、造像主、奉為、像名、願文の順であるが、紀年が終りにくるものもある)に比較すると、観経刻石の構成が幾分似ていることがわかる。即ち、造像の部分で文字に変えて、仏号を大書して刻した形式が生じたのではないかと推察するのである。こういう形態をとったことによつて、刻経が經典を後世に伝える意味の他に、供養の意味をももっていたと考えられてくるのである。

1 藤田宏達『観無量寿經講究』諸本対照表。

2 武内義雄「唐石刻観経について」(六条学報、二三五号)。

3 日本書道新聞第十一号。

4 拙稿「北斉の刻経について(印仏研究、二七卷一)。

5 内空外空……無法有法空(正藏八、250 b)。

6 尔時文殊……無念無作故(正藏八、738 a)。

7 北響堂山南洞に「弥勒仏、師子仏、明炎仏」の仏号刻。

8 他に、楊大眼造像記(無年月)、孫秋生造像記(五〇二)等。

(武蔵大学講師)